

令和7年度 九州栄養福祉大学 AI・データサイエンス教育プログラム  
自己点検・評価報告書

九州栄養福祉大学 教務委員会

## ■学内からの視点

### 1. プログラムの履修・修得状況

令和7年度における「AI・データサイエンス入門」の履修・修得状況は以下の通りであった。

学部・学科	対象学生数	履修者数	修了者数
食物栄養学部 食物栄養学科	89	12	12
食物栄養学部 食環境データサイエンス学科	6	6	6
リハビリテーション学部 理学療法学科	62	0	0
リハビリテーション学部 作業療法学科	27	0	0
こども教育学部 こども教育学科	25	18	18
計	209	36	36

### 2. 学修成果

令和7年度における「AI・データサイエンス入門」の平均点とGPAは以下の通りであった。

学部・学科	平均点	GPA
食物栄養学部 食物栄養学科	92.42	3.74
食物栄養学部 食環境データサイエンス学科	91.67	3.67
リハビリテーション学部 理学療法学科	—	—
リハビリテーション学部 作業療法学科	—	—
こども教育学部 こども教育学科	90.11	3.51

すべての学科において平均点が90点を超えていること、ならびに続く「3. 学生アンケート等を通じた学生の理解度」の結果より、「AI・データサイエンス入門」に対する理解度は高い水準にあると考える。

### 3. 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

授業の最終週に実施した「学生による授業評価アンケート」の「この授業の内容をどの程度、理解できましたか。」という設問に対する回答状況は以下の通りであった。

学部・学科	当該科目平均	学部平均	大学平均
食物栄養学部 食物栄養学科	4.25	4.19	4.15
食物栄養学部 食環境データサイエンス学科	4.33	4.19	4.15
リハビリテーション学部 理学療法学科	—	—	—
リハビリテーション学部 作業療法学科	—	—	—
こども教育学部 こども教育学科	4.63	4.68	4.15

授業内容の理解度のさらなる向上を図るべく、今後とも授業内容の検討を継続する。

#### 4. 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

後輩等他の学生への推奨度についての調査は特段行っていないが、授業の最終週に実施した「学生の授業評価アンケート」の「この授業に対する総合評価を5段階でしてください。」という設問から伺い知ることができるものとする。

令和7年度における「この授業に対する総合評価を5段階で評価してください。」という設問に対する回答状況は以下の通りであった。

学部・学科	当該科目平均	学部平均	大学平均
食物栄養学部 食物栄養学科	4.25	4.41	4.32
食物栄養学部 食環境データサイエンス学科	4.67	4.41	4.32
リハビリテーション学部 理学療法学科	—	—	—
リハビリテーション学部 作業療法学科	—	—	—
こども教育学部 こども教育学科	4.63	4.79	4.32

結果は学部・学科によって異なるが、回答が5段階評価であることを踏まえると、すべての学部・学科で80%を超える高評価（高い満足度）であったと捉えることができる。

学生の総合評価（満足度）のさらなる向上に向けて、今後とも授業内容ならびに教授方法改善の検討を継続する。

#### 5. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

AI・データサイエンス教育の重要性については、全学部長・学科長が参加する「部科課長会議」において学長が繰り返し述べており、全専任教員間でも共有されている。

令和7年度は、年度初めのオリエンテーション期間中に行われる履修指導において、クラス担任がAI・データサイエンス教育プログラムの紹介ならびに履修の推奨を行った。

AI・データサイエンス教育プログラム科目は選択科目であり、履修するか否かは学生の判断によるが、今後ともクラス担任による履修指導ならびに学生ポータルサイト（UNIPA）等への掲示を行うことで、全ての学部・学科から履修者が出るようにするとともに、履修率の向上に努める。

### ■学外からの視点

#### 1. 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本プログラムは令和7年度入学生から開始したものであり、現時点では本プログラムを修了した卒業生は出ていない。

なお、食物栄養学部食環境データサイエンス学科の開設にあたり、本学のデータサイエンス教育に期待、賛同、協力していただける企業・団体と包括連携協定を締結している。令和8年5月1日時点で、42の企業・団体と協定を締結しており、企業等からの期待は大きいと認識している。

#### 2. 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

産業界から講師を積極的に招聘し、実務経験に基づく知見を授業に取り入れるなど、産業界における実践的な取組を学びに反映したカリキュラムとなっている点は評価できる。これにより、学生が理論的な知識の習得にとどまらず、実務的な視点を持って授業に取り組む上で有用であると考えられる。

また、授業内容においても、社会とのつながりを積極的に盛り込むことで、学生が自身との接点を見出しやすくなり、学びをより身近なものとして捉えることができる構成となっている。その結果、学生の主体的な学修を促すとともに、より実践的な学びの実現に寄与することが期待される。

### **■数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること**

---

現在では、大半の学生が何らかの生成 AI を利用した経験を有している。生成 AI でできることに加え、生成 AI を支える技術、生成 AI 利用時の注意事項について紹介することで、AI を適切に活用できるように努めている。

また、PC を使ったハンズオン（演習）を取り入れ、受講生が手を動かしながら学習できる実践形式をとっている。

### **■内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること**

---

単なる知識の伝達にとどまることのないよう、PC を使ったハンズオン（演習）形式とすることで、理解度の向上に努めている。

また、授業内容の策定には食物栄養学部食環境データサイエンス学科のデータサイエンス教育担当教員が関わっており、社会の変化や生成 AI 等の技術の発展を踏まえた教育内容となるよう、適宜見直しを行う予定である。